公益の風 #14

東北公益文科大学
准教授
新名 阿津子

鳥海山・飛島ジオパーク、世界に向けて

2020年に日本ジオパークの再認定審査に合格した鳥海山・飛島ジオパークは、現在、ユネスコ世界ジオパークを目指し、活動を進めている。まずは、その風景をみてみよう。

鳥海山・飛島ジオパークには約60万年前に誕生し、今も活動を続ける活火山の鳥海山がある。大学から最上川を渡って鳥海山方面へと北上すると、目の前には青々とした水田が美しい庄内平野が広がり、少し小高い自然堤防の上には屋敷林をもつ集落が点在する。西側に目をやると日本海と庄内平野の間に庄内砂丘が南北に伸びる。そこには海岸林が広がり、畑がパッチワークのような模様を織りなす。砂丘の中を歩くと、スプリンクラーの散水やメロン収穫など、砂丘の農業景観を見ることができる。

遊佐に入ると、丸池様、牛渡川、釜磯海岸といった鳥海山のヘリから湧水が沸いている風景に出会う。北上する沿道には「岩がき」の幟が立ち、日本海に目を向けると、真っ平らな飛島が浮かんでいる。そして、松尾芭蕉が「奥の細道」に記し、江戸時代にも一大観光地であった象潟にたどり着く。この象潟は2500年前の山体崩壊と200年前の象潟地震によって作られたものであり、ダイナミックな地球の歴史を刻む風景である。

このように、鳥海山・飛島を取り囲む美しい景色には、地球の歴史の中で形成されてきた地質や地形、そこに生きる植物や動物、そして私たち人間の歴史や文化といったさまざまな特徴が記されているのである。ジオパークはこういった地域の自然や歴史、文化を守り、学び、次の世代に伝える世界的な運動である。

ジオパークの活動を推進するにあたり重要となるのがボトムアップ、つまり住民参加である。というのも、ジオパークは単なる地球遺産の保護保全プログラムではなく、現代社会のキーワードでもある「持続可能な開発」を実践し、環境、社会、経済のバランスの取れた地域社会の構築を目指すものであり、その地域に暮らす人、コミュニティのためのプログラムである。しかし、この点において、鳥海山・飛島ジオパークには課題が残る。

昨年度、ジオパークを構成する4市町（秋田県由利本荘市、にかほ市、山形県遊佐町、酒田市）の居住者382人に対して実施した鳥海山・飛島ジオパークに関する意識調査によると、鳥海山・飛島ジオパークを「知っている」、「名前を聞いたことがあるが詳しいことがわからない」と回答した人が約90％あり、高い認知率を誇る一方で、活動への参加の有無を見ると「（ジオパークの）活動に参加したことがない」との回答が90％を越えた。また、参加ニーズをみると「特に参加したいと思わない」が全体の35％、「よくわからない」が約28％となっており、ジオパーク活動への参加ニーズが低いことが浮き彫りになった。

鳥海山・飛島ジオパークでは基本計画と行動計画の改定に向け、これからのジオパークを考えるワークショップの開催が予定されている。今後、鳥海山・飛島ジオパークの活動を世界基準でより深く展開していくためにも、基本計画に地域コミュニティーの声を反映させること、さまざまな活動を共に実施することといった、ジオパークと地域をつないでいく活動が不可欠となろう。

象潟でのフィールドワーク（2022年）

「敬天愛人」2022年8月号 Vol.161掲載（荘内日報社発行）